

生活を主体的に創造しようとする態度を育む 高等学校家庭科の授業開発

—生徒の住教育に対する意識と学習要求を踏まえて—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教育分野 里吉 結子

1. 研究の背景および目的

1-1. 学習指導要領にみる家庭科の授業目標

高等学校学習指導要領¹⁾では家庭科の目標を、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を通して、様々な人々と協働し、よりよい社会の構築に向けて、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する資質・能力を育成することを目指す」としており、具体的に以下の3つの資質・能力を掲げている。

①生活を主体的に営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けること（知識及び技能）

②生涯を見通して生活の課題を解決する力を養うこと（思考力・判断力・表現力等）

③生活を主体的に創造しようとする実践的な態度を養うこと（学びに向かう力・人間性等）

また、①～③の資質・能力の育成を目指した質の高い学びを実現するためには、家庭科の特質に応じた物事を捉える視点や考え（見方・考え方）を働かせることが示されている。このことから、高等学校家庭科においては、知識・技能の習得にとどまらず、実生活と結び付いた学びを通して実践力を高める必要がある。

1-2. 先行研究による課題の整理

令和6年から7年にかけて国立青少年教育振興機構が4,955名の高校生に対して行った「科学への意識と学習に関する調査（日本・米国・中国・韓国の比較）」²⁾では、「将来に役立つと思う科目」について、日本の高校生は「家庭科」と回答した割合が47.5%で、この数字は他国を大きく上回っていた。しかしながら、家庭科を「好きな科目」と回答した割合は35%で、「役に立つ」と回答した割合よりも下回っていた。この結果から、家庭科は将来に必要な生活のスキルを身に付ける教

科として認識されているものの、生徒の興味・関心や愛着とは十分に結び付いていない実態がうかがえる。

また、野中ら（2018）³⁾は、家庭科は手や体を使って技術を身に付け、生活に役立つことを学ぶ、生きた勉強ができると認識されているが、日常生活での実践力は十分とはいえないと指摘している。その背景として、高等学校「家庭基礎」では、学習指導要領で必修と定められた内容を実践的に扱うには授業時間数が不十分である点が挙げられ、学習内容が生徒の実生活と十分に結び付いていない実態がある。

家庭科の抱えるこうした課題は、住居領域において特に顕著である。小川ら（2014）⁴⁾は、「家庭科の総授業時間数の多寡は、住居領域に充てる時間数とその内容に明らかに影響を与えている」と述べている。また、平成21年告示の高等学校学習指導要領「家庭基礎」の科目では、衣食住の領域ごとの項目数が2項目ずつで、3領域は同等の扱いだったのに対し、平成30年告示では、住居領域は衣・食領域と比較して少なくなったことから、速水ら（2020）⁵⁾は、住教育の指導の充実を期待することは難しいと危惧している。加えて、藤平・久保（2020）⁶⁾は「住居・住生活領域の学習は、学習経験、学習意欲などにおいて全体的に低調であり、生活への役立ちを実感しにくく、関心が低い」ことを報告し、生徒の関心を喚起する教材開発や学習指導要領の再編の必要性を指摘している。このように住居領域の指導の困難性は多くの要素によって複合的に生じている。

1-3. 研究目的

限られた授業時数の中で、生徒が住生活における学習内容を知識として理解することとどまらず、

自身の家庭生活、家庭と地域社会との関わりを関連付け、これからの住生活を主体的に創造することのできる学習が重要であると考えられる。ここでいう「住生活を主体的に創造する」とは、学校での学びを自己のキャリアや社会に活かそうとする力であり、「学びに向かう力・人間性等」の育成に焦点を当てる考え方である。このような観点から、生徒の興味・関心や学習要求に沿った授業を構想することは、学習意欲を喚起し、自らの将来を主体的に創造しようとする態度の育成につながると考えられる。

そこで本研究では、生徒の家庭科教育および住教育に対する意識と学習要求に基づき、「生活を主体的に創造する態度を育む授業」を構想・実践すると共に、授業前後のアンケート調査結果から、その効果と課題について検討することを目的とした。

2. 研究の方法

2-1. 研究対象

授業対象者は、小・中学校で家庭科住居領域の基本的な知識を習得したと考えられる高校生である。授業実践（6時間）は、令和7年度2学期に県立A高等学校普通科1年生1クラス34名（男子15名、女子19名）を対象に行った。

授業実践の1か月前に、「生徒の住教育に対する意識と学習要求」についてのアンケート調査を実施し、その結果をもとに授業計画を作成した。授業実践の2週間後、再度同様の内容に加え、授業評価についてのアンケート調査を実施した。

2-2. 事前アンケート

実施時期：2025年9月

設問内容：家庭科及び住居領域に対する意識（興味・関心、得意、役立ち感、記憶の残りやすさ）、学習意欲や授業態度、学習要求等

2-2-1. 学習意欲と授業姿勢

「家庭科の授業に意欲的に取り組むことができるか」、「授業の学びを自分事として捉え、時間の流れや生活の広がりを意識することができるか」、「授業を通して将来のことを考えた

り創造したりすることができているか」の3項目について、「できている」「どちらかといえばできている」「どちらかといえばできていない」「できていない」の4段階で回答を求めた（表1）。意欲的に取り組むことが「できている」「どちらかといえばできている」と回答した生徒は30名（88.2%）であり、学習意欲の保持が認められた。一方で、「授業の学びを自分事として捉え、時間の流れや生活の広がりを意識すること」や「家庭科の授業を通して将来のことを考えたり創造したりすること」については、共に「どちらかといえばできていない」とする生徒が9名（26.5%）存在し、学習への積極性と、学びを自己の生活や将来と結び付ける意識との間に課題が見られた。

表1 学習意欲と授業姿勢について

	単位：人（%）			
	できている	どちらかといえばできている	どちらかといえばできていない	できていない
意欲的に取り組んでいる	10(29.4)	20(58.8)	4(11.8)	0(0.0)
時間の流れや生活の広がりを意識している	9(26.5)	16(47.1)	9(26.5)	0(0.0)
将来について考えたり創造したりしている	13(38.2)	12(35.3)	9(26.5)	0(0.0)

2-2-2. 家庭科および住生活に対する意識

「家庭科は実生活で役立つと思う」「家庭科で学んだことを実生活で役立てている」の2項目について、「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階で回答を求めた（表2）。役立つと思うかについては、33名（97.1%）が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。

表2 学習内容の有用性と実践状況

	単位：人（%）				
	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	あまり思わない	全く思わない
実生活で役立つと思う	16(47.1)	17(50.0)	1(2.9)	0(0.0)	0(0.0)
実生活で役立っている	1(3.0)	15(45.5)	11(33.3)	5(15.2)	1(3.0)

一方、役立っているかについては「そう思う」が1名（3.0%）、「ややそう思う」が15名（45.5%）と半数に満たなかった。家庭科の学習内容は有用であると認識されているものの、学習内容が実生活での具体的な実践には十分に結び付いていないことが明らかとなった。

「家庭科は好きですか」「住居領域は好きですか」の2項目について、「好き」「どちらかといえば好き」「どちらともいえない」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」の5段階で回答と理由(自由記述)を求めた(表3)。家庭科は「どちらかといえば嫌い」が4名(11.8%)、「どちらともいえない」が13名(38.2%)存在し、住居領域は「どちらかといえば嫌い」が4名(11.8%)、「どちらともいえない」が17名(50.0%)存在した。理由は「苦手意識」や「興味・関心の低さ」等が挙げられた。

表3 家庭科および住居領域に対する好意度

	単位:人(%)				
	好き	どちらかといえば好き	どちらともいえない	どちらかといえば嫌い	嫌い
家庭科が好き	8(23.5)	9(26.5)	13(38.2)	4(11.8)	0(0.0)
住居領域が好き	1(2.9)	12(35.3)	17(50.0)	4(11.8)	0(0.0)

「住居領域への苦手意識」について、「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3段階で回答を求めた。「どちらともいえない」の22名(64.7%)のうち、14名(全体の41.2%)がその理由を「覚えていないから」と回答しており(図1)、既習内容が印象に残っておらず、学習経験が十分に定着していない可能性が考えられた。

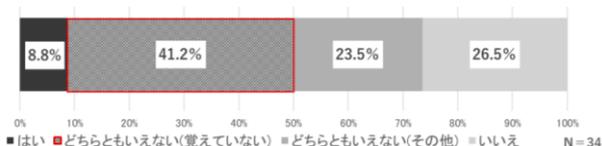


図1 住居領域に対する苦手意識

次に、「家庭基礎」で学習する9分野を、「実生活に役立つ順」及び「興味・関心がある順」に並べさせた。1点から9点の各得点を与え順位付けた結果、住居領域は共に8番目で、他領域に比べ有用性が低いと感じられていることや興味・関心が低いことが明らかとなった(図2、図3)。



図2 有用性

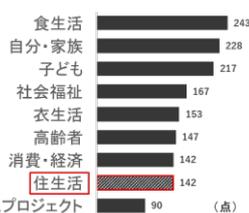


図3 興味・関心

2-2-3. 学習要求(授業形態と学習内容)

「どのような授業形式を希望しているか」を把握するため、10項目の中から、3つを選択するよう求めた。「実際に何かをつくり、体験したりする授業」が23名(23.2%)と最も多く、次いで「グループで考えたり調べたりする授業」が21名(21.2%)であった。「画像や映像を用いた視覚的に分かりやすい授業」も12名(12.1%)と一定の支持を得た(表4)。

表4 学習要求(授業形態)

	単位:名(%)
実際に何かをつくり、体験したりする授業	23(23.2)
グループで何かを考えたり、調べたりする授業	21(21.2)
スクリーンを活用し、画像や映像を用いて視覚的に分かりやすい授業	12(12.1)
学校外に出て、調べたりインタビューしたりする授業	12(12.1)
ワークやプリント活用し、穴埋めしながら進める授業	10(10.1)
個人で何かを考えたり、調べたりする授業	7(7.1)
板書中心の授業	6(6.1)
ICTを活用して調べたり、まとめたりする授業	5(5.1)
授業中に発言したり、みんなの前で発表したりする授業	2(2.0)
自分たちでテーマ・課題を見つけ、解決のために考えたり調べたりする授業	1(1.0)

次に「住居領域において、学びたい内容」を把握するため、教科書に則って12項目を提示し、4つを選択するよう求めた。「インテリアデザイン・室内装飾・家具」が28名(21.2%)と最も多く、次いで「安心・安全な住まい」が18名(13.6%)、「日本の住まい」と「住まいを計画する」が各々14名(10.6%)であった(表5)。

表5 学習要求(学習内容)

	単位:名(%)
インテリアデザイン、室内装飾、家具	28(21.2)
安心・安全な住まい	18(13.6)
日本の住まい	14(10.6)
住まいを計画する(間取り)	14(10.6)
健康に配慮した快適な室内環境	13(9.8)
だれもが快適に住まう	13(9.8)
住まいの機能	8(6.1)
持続可能な住まいづくり(環境・共生)	8(6.1)
住居の維持・管理	7(5.3)
持続可能な住まいづくり(住宅政策と住まいの課題)	5(3.8)
気候風土と住まい	2(1.5)
生活様式と住まい	2(1.5)

表6 授業構成 (全6時間)

時間	主な学習内容	ねらい
1	〈住まいの文化〉 ・和風と洋風の住洋式・平面図の理解 ・動線とゾーニング ・生活行為と住まい	・和風と洋風の住まい方について理解し、良さを活かした住まい方について考えることができる。
2	〈安全で快適な住まい方1〉 ・健康的な室内環境 (日照と採光・通風・喚起と結露・シックハウス症候群・暖房と冷房・騒音と遮音) ・災害と住まい方(安全対策) ・快適な住まい方(バリアフリー・ユニバーサルデザイン)	・安全で快適な住まい方について理解することができる。
3	〈安全で快適な住まい方2〉 ・人体寸法・動作寸法	・快適で豊かな住生活の実現を目指して、住まい方を考えることができる。
4	〈住まいを計画する〉 ・マイルームのレイアウトの作成	・住まいの生活空間の機能を理解し、より快適な住まい方を考え、平面を計画することができる。
5	〈住まいを計画する〉 ・3Dシミュレーション	・理想の住まい方を3D化して、将来の生活を創造することができる。
6	〈これからの住生活〉 ・自分らしい住まい方	・他者との交流を通して、自分らしく、安全で快適な住まい方について考えることができる。

2-2-4. 事前アンケート結果のまとめ

アンケート結果から、生徒は家庭科の学習に一定の学習意欲を有し、家庭科が実生活に役立つ教科であるという認識は高かった。一方で、授業の学びを自分事として捉え、将来の生活と結び付けて考えたり、実生活で実践したりする意識は十分とは言えず、学習意欲と学びの内在化との間に乖離があった。特に住居領域においては、興味・関心の低さや苦手意識を示す生徒が存在し、小中学校までの学習内容が印象に残りにくい、あるいは十分に定着していない可能性がある。こうした中で、体験的な学習活動や視覚的に分かりやすい授業、住空間を具体的に扱う学習に対する学習ニーズが高いことが確認された。これらの生徒の実態や学習要求を踏まえ、身近な題材やICTを活用して住空間を可視化し、学習を自らの生活と関連付けて捉えさせるなどの授業の工夫が、生徒の住居領域への興味・関心を高め、生活を主体的に創造しようとする態度を育む上で有効だと考えられる。

3. 授業実践

実施時期：2025年10月～11月（全6時間）

教科書：実教出版「家庭基礎」

速水ら(2018)⁷⁾の調査において、高等学校住居領域の授業時間数の平均は5.27時間であるこ

とが示されている。本研究ではA校の年間指導計画を踏まえ、実践的・体験的な学習活動を十分に取り入れるために全6時間の授業を設定した(表6)。学習指導要領および教科書の内容を基に、事前アンケートによって把握した生徒の実態や学習要求を踏まえ、「興味・関心の向上」「自己の生活との関連付け」「苦手意識の軽減」を目指した(3つの目標)。

なお、本授業は高等学校学習指導要領(平成30年告示)に基づいて設計し、他領域との横断的な内容は除外した。事前アンケート結果を基に設定した3つの目標と、それに対応する具体的な授業内容との関係を表7・表8・表9に示す。

【第1・2時間目】

導入では、アニメの間取り図を題材とし、平面表示記号クイズを取り入れ、生徒の住生活への興味・関心を高め、基礎的な知識の習得を図った。また、「理想の住まい」に関する回答を求め、テキストマイニングで可視化・共有し、自己の生活との関連付けや住まいに対する価値観の多様性への気づきを促した。展開①では、和と洋の住まい方の特徴の比較を行った。萬羽(2017)⁸⁾は、間取り図の読み取りは短時間で住まいに関する理解を深めるのに有効と述べ、綿引ら(1996)⁹⁾は、アニメ教材は生徒が興味を持つと述べている。そこで、「サザエさん」と「トイ・ストーリー

一」の間取り図を用いた。起居様式や部屋構成等の観点から間取りの特徴を読み取らせ、個人の思考→グループでの意見交換→全体共有を通して理解を深めさせた。また、和洋折衷住宅等の事例を提示し、住まい方は生活様式や価値観に合わせて工夫できることへの理解を促した。展開②では、安全で快適な住まい方の理解を目標とした。日照・採光、通風などの観点から、室内環境の維持・管理を内容とした。ワークシートや視覚的な図解によって苦手意識の軽減を図った。まとめでは、「理想の住まい」を具体的に構想させる活動を通じ、学習内容を自己の生活と結び付けて捉える姿勢の育成を図った。

表7 第1・2時間目の学習内容

	主な学習活動	興味関心の向上	自己の生活との関連付け	苦手意識の軽減
導入	住みたい家について考えよう	●	●	
	なんのアニメの間取りだろう	●		
展開①	平面表示記号クイズ	●		
	和風(サザエさん)と洋風(トイストーリー)の住まい方の特徴を見つけよう	●		
	それぞれの家の特徴を生かしてどんな生活ができるか考えよう		●	
	現代の住まい方(和洋折衷の家)		●	
展開②	安全で快適な住まい方について考えよう (採光・通風・冷暖房・遮音・安全(シックハウス症候群、災害、バリアフリー)・プライバシー)			●
まとめ	本時の感想と目標到達度の記入しよう		●	●
	住みたい家について考えよう		●	

【第3・4時間目】

導入では、前時の学習内容と関連付けるため、安全性や快適性の面で配慮が不足している間取り図「ヘンナマドリ」を提示し(図4)、違和感に気付かせる活動を行った。窓や風通し、動線について考えさせるためである。展開①では、自身の人体寸法に基づく動作寸法の計算や、家具配置の検討を通して空間把握を試みた。

表8 第3・4時間目の学習内容

	主な学習活動	興味関心の向上	自己の生活との関連付け	苦手意識の軽減
導入	ヘンナマドリ(前時の復習)	●		●
展開①	部屋の広さと人体寸法・動作寸法について知ろう		●	●
展開②	一人暮らしを想定して、将来住みたい部屋のレイアウトを考えよう (一人暮らしの部屋で何を大切にしたいか、実現させるためにどんなものが必要か)	●	●	
	間取り図に家具の配置を記入しよう (実物サイズを縮尺して記入)	●	●	
まとめ	工夫したところと疑問点の記入しよう		●	●

展開②では、ワークシートを用い8畳間での一人暮らしを想定した家具配置を考え、工夫点をグループで共有した。まとめでは、ワークシートへの疑問点の記入を通してつまづきを把握し、次時に助言を付して返却することで、理解の定着と個別指導の充実を図った。



※マイホームクラウドで作成¹⁰⁾

図4 導入で提示した間取り図

【第5・6時間目】

導入では、前時に作成した家具レイアウトをグループ内で紹介し合い、工夫点や疑問点を意見交換した。助言をもとに見直すことで、多様な視点から住まい方を捉える機会とした。米谷ら(2024)¹¹⁾は、ICT端末による擬似的な住空間体験は有効であると指摘している。そのため展開①では、カリモク家具株式会社のサイトに公開されている“カリモク3Dシミュレーター”¹²⁾を用いて(図5)、自身が考えたマイルームを立体化し(図6)、配置や動線、空間の広がりを見えるように確認できるようにした。展開②では、立体化したマイルームを見せ合い、工夫点を発表した。自身の住まい方を言語化し、他者の考えに触れることで視点を広げることをねらった。

表9 第5・6時間目の学習内容

	主な学習活動	興味関心の向上	自己の生活との関連付け	苦手意識の軽減
導入	前時で作成した部屋のレイアウトを再確認しよう			●
	グループ内でマイルームの紹介を行い、互いに工夫したことや疑問点、アドバイスを伝え合おう	●	●	
展開①	作成した部屋を3D化させよう	●	●	
展開②	マイルームを紹介しよう	●	●	●
まとめ	単元を通して学んだことやこれからの生活に活かしたいことを記入しよう		●	●



図5 3Dシミュレーターによるマイルームの立体化



図6 実際に生徒が作成したマイルーム

4. 授業実践の評価

4.1. 授業実践前・後の生徒の意識変化

第1・2時間目の授業前後に行った「理想の住まい」のアンケート結果をテキストマイニングしたものを図7に示す。授業前は「広い」「一軒家」「庭がある」等の抽象的な回答が多くみられたが、授業後は「和風/洋風」「和洋折衷」「風通し」等、学習内容を踏まえた回答へと変化した。

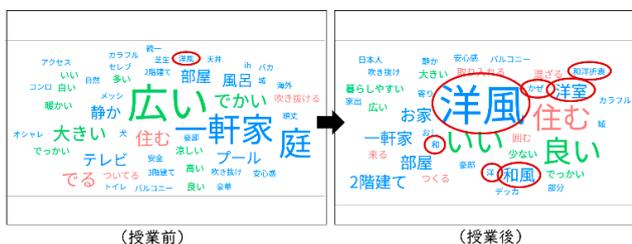


図7 理想の住まいについての意識変容

4.2. 事前・事後アンケート結果の比較

「楽しく学ぶことができたか」「夢中・没頭することができたか」の2項目について、「できた」「どちらかといえばできた」「どちらかといえばできなかった」「できなかった」の4段階での回答とその理由(自由記述)を求めた。「楽しく学ぶことができた」は肯定的な回答が100%であった。「夢中・没頭することができた」も肯定的な回答が94.1%を占めた(表10)。理由としては、

表10 授業に対する意識・態度の変化

	単位:人(%)			
	できた	どちらかといえばできた	どちらかといえばできなかった	できなかった
楽しく学ぶことができた	23(67.6)	11(32.4)	0(0.0)	0(0.0)
夢中・没頭することができた	18(52.9)	14(41.2)	2(5.9)	0(0.0)

3Dシミュレーションやアニメの間取り図の活用に対する評価が高く、「住まい方を具体的にイメージできたから」という回答が多く見られた。

「6時間の授業で良いと感じたもの」(複数選択可)を聞いてみると、「部屋の3D化」が27名(21.0%)と最も多く、次いで「グループワーク」および「アニメの間取りの活用」が各17名(13.2%)、「ワークシート」が16名(12.5%)であった。一方で、「ICTを活用して調べたり、まとめたり、つくったりしたこと」は4名(3.1%)と最も評価が低かった(図8)。

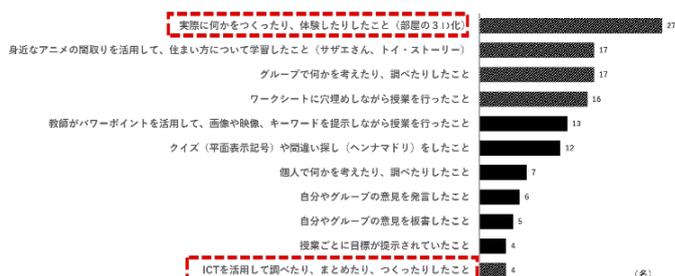


図8 6時間の授業で良いと感じた活動

「家庭科の授業に意欲的に取り組むことができてきているか」(図9)、「授業の学びを自分事として捉え、時間の流れや生活の広がり意識することができているか」(図10)、「授業を通して将来のことを考えたり創造したりすることができているか」(図11)の3項目について、「できている」「どちらかといえばできている」「どちらかといえばできていない」「できていない」の4段階で回答を求めた。

意欲的に取り組むことが「できている」「どちらかといえば取り組んでいる」と回答した生徒は、授業後は33名(97.0%)で、授業前と比較すると「取り組んでいる」生徒が増加した。

「時間軸・空間軸に対する意識」及び「将来を創造しようとする態度」については、いずれとも「どちらかといえばできていない」と回答した生徒が大きく減少した。

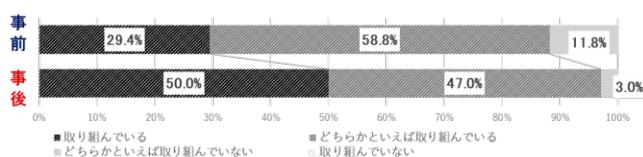


図9 学習意欲の変化

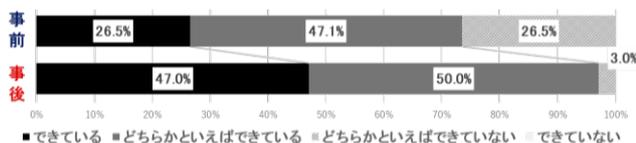


図 10 時間軸・空間軸に対する意識の変化

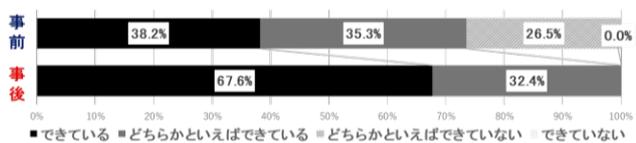


図 11 将来を創造しようとする態度の変化

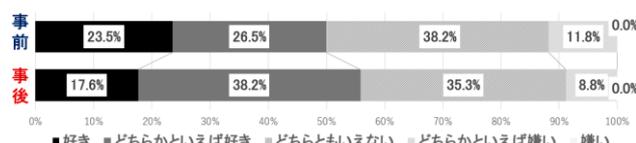


図 12 家庭科に対する好意度の変化

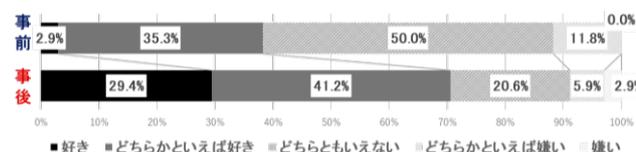


図 13 住居領域に対する好意度の変化

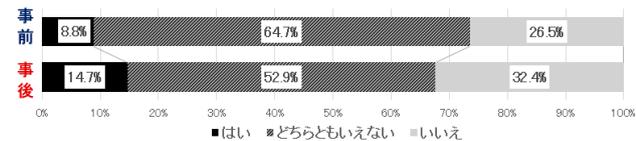


図 14 苦手意識の変化

次に「家庭科は好きですか」「住居領域は好きですか」という問いについて、「好き」「どちらかといえば好き」「どちらともいえない」「どちらかといえば嫌い」「嫌い」の5段階での回答とその理由(自由記述)を求めた。両項目ともに肯定的な回答が増加した(図12、図13)。「どちらともいえない」は減少したものの、依然として一定数見られた。また、「住居領域に苦手意識があるか」について、「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3段階での回答とその理由(自由記述)を求めた。「どちらともいえない」という回答が減少した(図14)。

家庭基礎で学習する9分野を「実生活に役立つ順」及び「興味・関心がある順」に並べさせた。1点から9点の各得点を与えて順位付けをした結果、いずれにおいても住居領域は授業前よりも順位が上がり、住居領域に対する有用感や興味・関心が肯定的に変化した(図15、図16)。

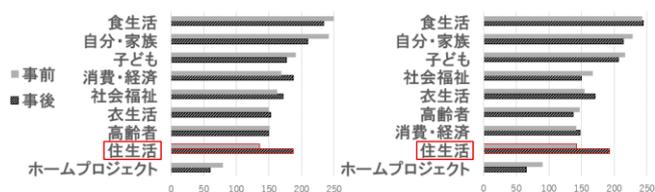


図 15 有用感

図 16 興味・関心

4.3. 授業実践後の日常生活への影響

「家庭科で学んだことを実生活に役立てているか」について、「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階で回答を求めた。授業後は、「そう思う」の回答が大幅に増加した(図17)。

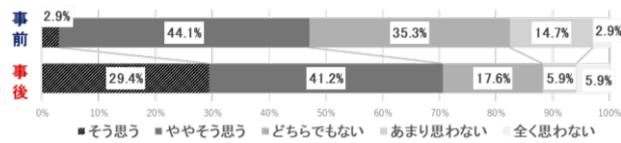


図 17 実践状況の変化

また、「6時間の学習内容を実践してみようと思うか」については33名(96.0%)が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答し、肯定的な結果がみられた。しかし、授業終了後2週間で学習したことを実践した生徒は、34名中5名(14.7%)であった。具体的な内容としては、「部屋のレイアウトを変えた」(4名)、「部屋をきれいにした」(1名)だった。

5. まとめと考察

本研究では、生徒の家庭科教育および住教育に対する意識と学習要求に基づき、「生活を主体的に創造する態度を育む授業」を構想・実践すると共に、授業前後のアンケート調査結果から、その効果と課題について検討することを目的とした。住居領域全6時間の授業実践から、生徒の「生活を主体的に創造しようとする態度」を育むための重要な知見が三点得られた。

第一に、ICT活用のあり方と役割についてである。事後アンケート結果において、ICTを用いた学習よりも、3Dシミュレーターによる空間の可視化が際立って高い評価を得たことは、ICTを学習の目的ではなく、思考を具体化するための

有力な手段として位置づける重要性を示している。平面図を立体的に捉え直すプロセスが、学びと実生活の乖離を埋め、学習内容を自分自身の課題として内在化したと考えられる。第二に、住まい方のイメージの獲得が多角的な視点を養う点である。アニメの間取り図を用いた学習や3D化を通じて、生徒の意識は抽象的な願望から、機能性や安全性、気候風土対応など、学習内容を踏まえたものへと変化した。また、シミュレーション内で家具の金額が表示されたことで、生徒の中にコスト意識が芽生え、住生活を「消費・経済」の側面からも捉えたことは、将来の生活をより現実的な創造の動機付けになったと分析できる。第三に、実践的な態度の変容である。住居領域に対する有用感や興味・関心の向上のみでなく、自らの生活環境を改善しようとする具体的な行動が見られたことは、体験的な学習が「学びに向かう力」の育成に直結することを示している。

6. 今後の展望

具体的なイメージをもつことが将来の創造に繋がるという知見は、全領域で有効である。家庭科の他領域においても、実体験等を伴う学びを積極的に取り入れることで、生徒が主体的に生活を創造する資質・能力を育むことが期待される。しかし、本実践では、学習内容を日常生活で主体的に活用し、継続的な行動へと結びつける実践力・活用力の育成には十分に至っていない課題が明らかとなった。

また、ICTを目的化せず、生徒の思考を深めるツールとしていかに有効利用するかが課題である。一つの活動から多角的な学びを引き出す教材開発を進め、持続的な実践へと繋げる指導モデルを構築していく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省、【家庭編】高等学校学習指導要領解説、2018
- 2) 国立青少年教育振興機構、高校生の科学への意識と学習に関する調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－、2025
- 3) 野中美津枝・鈴木真由子・鈴木民子・荒井紀

- 子・小川裕子・河野公子・財津庸子・高木幸子・中西雪夫・日景弥生・藤田晶子：学会特別研究委員会「家庭科未来プロジェクト」報告論文「家庭生活に関わる意識や高等学校家庭科に関する全国調査」シリーズ3、日本家庭科教育学会誌、61(3)、pp.164-171、2018.11
- 4) 小川裕子・中島喜代子・石井仁・田中勝・杉浦淳吉・小川正光：中学校、高等学校家庭科における住居領域授業実践の実態からみた課題と提言、日本家庭科教育学会誌、57(1)、pp.3-13、2014.5
- 5) 速水多佳子・渡瀬章子：高校生の家庭科住居領域に対する意識と授業による変化、日本家政学会誌、71(3)、pp.182-192、2020
- 6) 藤平眞紀子・久保博子：中学・高等学校家庭科における住居・住生活分野の学習と日常生活への関わりに関する検討－教育学部および生活環境学部学生を対象とした家庭科教育に関する調査－、日本家政学会誌、71(1)、pp.12-30、2020
- 7) 速水多佳子・渡瀬章子：家庭科住居領域における指導の実態と家庭科教員の意識、日本家政学会誌、69(7)、pp.503-514、2018
- 8) 萬羽郁子：家庭科住居領域における間取り図の読み取りによって期待される学習効果－日本とアメリカの漫画の主人公の家の間取り図の比較による気付き－、東京学芸大学紀要、総合教育学系Ⅱ 68、pp.361-368、2017
- 9) 綿引伴子・山岸雅子・分校淑子：高等学校「住居領域」教育内容・方法の検討(第2報)－生徒による授業評価－、日本家庭科教育学会誌、40(3)、pp.57-62、1997
- 10) マイホームクラウド
(<https://myhome-cloud.net/>)
- 11) 米谷悠太・千葉和代・川邊淳子：小中高家庭科におけるICT活用の現状と課題－先行実践研究論文の検討から－、北海道教育大学紀要(基礎研究編)、75(1)、pp.111-122、2024.7
- 12) カリモク 3D シミュレーター
(https://www.karimoku.co.jp/3d_simulator/)